

福居誠二先生ご退職に寄せて

—「音声学」と「人の縁」—

大阪大学歯学部附属病院顎口腔機能治療部 杉山千尋

まだまだ暑さも厳しい8月のことです。「福居誠二先生が退職されるので、記念の紀要への原稿をお寄せくださいませか？」というご依頼を頂戴しました。二重にびっくりしました。まずは、「私でいいんですか?!」という驚き。そしてもう一つは、「福居先生がご退職?もう?」という驚きです。もう大学時代はとうの昔になるのに、いつまでも卒業して間なしの気持ちでございました。

本来でしたらご退職記念の巻にふさわしい学術的な文章をお寄せするべきではありますが、残念ながら福居先生のご専門である音声学はおろか、言語学の教育・研究とは違う分野に携わる身であり、とてもそのような大作をしたためることはできません。また他にも多くいらっしゃる教え子の皆様を差し置いて…とお引き受けすることを当初は躊躇しておりました。でも福居先生との思い出の中にはわたくしの今日の在り方に大きく関わるエピソードがいくつもあって、とてもお世話になったという気持ちを常に持ち続けておりましたし、それをきちんと形にして何よりも先生お伝えできればと思うに至り、「福居先生との思い出とわたくしの今の仕事や気持ちをからめたような文章になります…」と、お引き受けいたしました。福居先生との出会い、幾つかの思い出深いエピソードについて、拙いながらも綴らせていただきたく存じます。

福居先生とわたくしのご縁は、わたくしが大阪外国語大学のスウェーデン語専攻コースに入学した頃にさかのぼります。一年生から専門科目の授業がしっかりと入った非常に充実したカリキュラムで、1時間目から5時間目まで授業がぎっしり詰まっている曜日もありました。教科書とプリント、少なくとも辞書が2冊は入った重たい鞆を抱えての通学にも慣れてしばらくしたころ、何曜日だったかの5時間目の授業が「すごい難しい!」という噂が学生の間を広まったのです。なんでもLL教室に籠って、デンマーク語やスウェーデン語（お互いに兄弟関係のような言語なので、カリキュラム・授業・研究室も共通の部分が多かったのです）を、ひたすら聞き取り続ける授業だとか。その噂を耳にした若かりし頃のわたくしは、入学前に少しばかりスウェーデンに滞在していたことや、発音に変な自信を持っていたこともあったので、どうしてもその授業に挑戦したくなってしまいました。時間割を確認すると、たまたまその時間がぼっかりと空いているではありませんか!なんという偶然。先生のところに押しかけて「聴講させてください」とあつかましくも直接お願いをしました。それを「どーぞどーぞ」と寛大にもお許しくださったのが、福居先生だったのです。その日から先生とのご縁が始まりました。実に23年前、1993年のことであります。履修登録はとうに締め切られていたので単位なしの聴講生でした。というわけで福居先生、実は先生の授業の正式な履修生ではなかったかもしれません。

初めて参加した授業の課題は、アストリッド・リンドグレンの名作「やかまし村のこどもたち」の映画の歌を聴いて歌詞を書き取るというものでした。子どもの可愛いらしい声や曲調の軽快さとは対照的なほどに、わたくしも含め学生たちはもう本当に必死でした。ヘッドホンを着け、テープが伸びるかと思うほど再生と巻き戻しを繰り返して聴きまくり、やっと書き取ったものを読み返すと全く意味をなしていない非文になっているから、初めからやり直し!こんなプロセスを繰り返し経た聴き取りの結果は、正答率が半分にも届くかどうかという惨敗でした。付け上がっていると鉄槌が落ちてくるものですね。これじゃいけない、と大いに反省いたしました。残念ながらその時のノートもテープも手元には残っていないのですが、何回も聴いたおかげで20年以上の時を経た今でも出だしの部分が歌えます。“Vill du veta vem som bor i Bullerbyn? Det är Lasse å så Bosse å så jag . . . (やかまし村に住んでいるのが誰だか教えてあげよう

か？ラッセにボッセ、それから私…）”。

福居先生とのご縁は、このように劇的に（？）幕を開けました。

冒頭に書きましたとおり、わたくしは音声学の研究には従事しておりませんが、音声学と関連は細々とながら持ち続けております。言語聴覚士、あるいはSTと呼ばれる職業をお聞きになったことはおありでしょうか？いわゆる言語障害、ことばやコミュニケーションの困難さを持っていらっしゃる方々のリハビリを担当する専門職です。わたくしはその中でも少し変わり種で、歯学部で口蓋裂（補足1）という生まれつきの疾患のために発音がうまくできにくい方々のリハビリを主な業務としております。例えば「タ行」が「カ行」に近い音になるとか、「サ行」が「チャ行」になるとか、お声が鼻に抜けたようなフガフガした感じになる、というような症状が代表的です。このような状態を「構音障害（こうおんしょうがい）」と呼びます。この構音障害の評価や治療に音声学の知識が非常に役立つのです。先述のタ行の例ですと、[t]音は舌先を上顎の前歯ウラに付けて発音するのですが、舌をつける位置が後ろへずれてしまうために[k]音に近づく、「サ行」の例ですと、[s]音は舌先と前歯のウラに作った細い隙間で呼気の摩擦の音を出すはずのところ、舌先が前歯ウラから歯茎にかけて接触してしまうから「チャ」になる、という理屈です。音声学における大切な分野の一つが、このように「この音は口の中のどの位置で（調音点あるいは構音点）、どのように（調音法あるいは構音法）作るのか」というような、言語の音声の特徴の詳述なのです。われわれがふだん何気なく話していることをいかに客観的にとらえて知識の体系を成して行くかというのがこの学問の面白みであると思います。そしてこの考え方を実践的に、わかりやすく、福居先生はご教授下さいました。

言語の音声というものに対するわたくしの視野が、一気に拡大したのも、先生のご教授のおかげです。思い出深いものをもう一つ挙げますと、「日本語の50音を発音記号で書き表す」というものです。「シはローマ字でshiだから、英語の“she”と同じ記号でいいでしょ？シャの小さいヤは、半母音だから[j]をシの後ろにつけて…と。自分たちの母国語でなんでこんなことするんだろう。きっとローマ字並みにみんな同じようなものを書いて持ってくるんじゃないの？」と思いつつ課題をこなして、次の授業にそれを持って行きました。そして開けてびっくりとはまさしくこのことです。みんなの書き方が違うこと違うこと！福居先生はもちろん、それを見越していらっしゃるのでしょうか。いつもの笑顔を浮かべながら、「あなたはシャをこんな風に言うの？本当？」と一つ一つご指摘くださいました。自分で出している「音」の特徴に何て無関心だったんだろうと、ハッと気づかされる思いでした。子どもの頃から外国語の音を聞き取って口真似することがどちらかというと得意で、そういうことに対する興味を抱いておりましたが、「聞く」と「言う」の二つだけで満足しておりました。この課題によって三つ目の「書き表す」という要素が加わり、それぞれの要素がお互いに作用して質を高める方向に向かっていく仕掛けに気付いたので、つまり、表記するためには、音の特徴をより詳細に捉える必要があり、さらに詳しく聞くように耳を傾けます。発音するときも、自分の口の動きや呼気が弾けたり流れ出たりする感覚への注意を高めます。ちょっとした調音点のズレが音の違いにつながることで、その違いを生むのは口の動きのごくわずかな違いであることに気づくと、たちまちその面白さに魅了されました。のめり込むほどに一生懸命勉強を…というほど勤勉な学生ではなかったのですが、何かにつけて音声学の書物をめぐり、関連する講義を取るようになり、そうしているうちに「言語、音声、身体の動き」がキーワードとなって、自分が進みたい道が徐々に形を成しはじめました。さらに言語聴覚士という職業に出逢うきっかけも、実は福居先生の授業に隠れていたのです。

せっかく大阪外大で学んでいるのだから、卒業後はスウェーデン語は無理でもせめて「ことば」に関わる仕事には着きたいと願っていました。しかしながら折しも日本経済は冷え込みが厳しく就職は超水戸期。進路の選択肢は少なく、良い案はなかなか思いつきませんでした。大学院に進んで音声学をもっと深く学びたいと夢に描いた時期もあり、もちろん福居先生にご相談申し上げたのですが、「音声学で研究ができる大学院って日本にはあんまりないんですね…」というお返事。それにへこたれて「やっぱりダメな

のかー」などと諦めてしまうような根性なしの学生でした。そんなある日の授業で先生が日本語の発話の録音をお聞かせくださいました。話し手がどういう方だったのかなど詳しい経緯は覚えていないのですが、「私の“患者さん”なんですけどね…」とボソッと一言おっしゃったのです。後々に先生は「そんなことしたっけ？」とおっしゃったのですが、確かに私の耳と目はその光景を覚えています。それまではことばの障害に対する訓練をする人があるなどということは思いも及ばなかったのですが、ああ、きっといいに違いない、そんな仕事をしてみたい、と考えるようになりました。本屋さんを巡ったり、方々に聞いて回ったり、当時広まりつつあったインターネットを使ったり、随分苦労した覚えはありますが、その仕事は「言語聴覚士（補足2）」という職業であることを知り得ました。

音声学を極めるといふ道は諦め、卒業と同時に神戸にある専門学校に入り言語聴覚士を目指す勉強を始めました。外大で世話になった先生へは年賀状を差し上げるぐらいという不義理を働いておりましたが、福居先生だけは別でした。とはいっても偶然、福居先生がお越しになるところにわたくしもお邪魔してただけの話なのですが、一つ目は当時の大阪外大の外国人講師のヴィヒマン先生が主催されていたスウェーデン語会話クラス。お忙しいなか福居先生も生徒のお一人として参加されていました。デンマーク語とスウェーデン語の響きの違いを見事に使い分けられる先生の「匠の技」にただ感銘を受けるばかりでした。それともう一つは、福居先生が主催されている近畿音声言語研究会。現職についてすぐ、当時のわたくしの上司がそちらの会に参加したことがあり、福居先生を存じ上げているということが分かったので。平凡な表現ですが、人の縁の不思議さとしか考えられませんでした。

そんな不思議なご縁を感じながら言語聴覚士として働く日々が続きました。近畿音声言語研究会の方も、まだ駆け出しだった頃に2回ほどお伺いしたまま、そのあとは普段の忙しさにかまけて幽霊部員になってしまいました。音声学の知識は日々の仕事の中で実践はしているものの卒業以来アップグレードされることはなく、音声学はかつて目指した道というような雰囲気です。10年以上が過ぎてしまいました。そこにやっと転機が訪れます。口唇口蓋裂の患者さんのスピーチの評価についての講演会のお手伝いをする機会をいただきました。音声学的な観点についてもご講演で触れられるというのです。音声学にまた近づくことができる！と高ぶる気持ちを感じながら講師をお迎えして打ち合わせをはじめました。講師はイギリスの方でしたので日本語の音韻について説明したところ、「日本語の“ヒ”の子音は“ハ、ヘ、ホ”の子音とは異なるのね。ならばこれは音素？それとも異音？」とご質問があったのです。思考がカターンと音を立てて停止する感覚を覚えました。福居先生にあんなに教えていただいたことなのに思い出せない！そしてその場に居合わせた言語聴覚士の誰もが、この質問にきちんと答えられない！これではいけないと、今度ばかりはわたくしから福居先生に能動的にご連絡を差し上げました。そのときの文章たるや、いま読み返すとクエスチョンマークの連発で、頭脳の混乱ぶりがそのまま文章に現れています。

“音素 /h/ は、後続母音によって声門、硬口蓋、口唇の摩擦音になる。これは条件異音という理解でいいのでしょうか？硬口蓋摩擦音になるはず「ひ」が声門摩擦音になっても、これは自由異音でいいのでしょうか？「拗音」の「ひゃひゅひょ」は音素？ /h/ の異音？ミニマルペアができるならそれは異音ではなく音素、という前提をもってすると「百」と「履く」「表」と「法」…音素ですか？そして /s/ と /t/ は、どうなるのでしょうか？口蓋化の果てに別の音素になった、という考え方は、全く違いますか？”

これをお送りしたのがなんと夜中の12時前。不義理を働いてばかりの教え子からのこんな時刻の不躾な質問にも、福居先生はすぐさま丁寧なお返事を下さいました。まさしく、大学一年生のわたくしが授業の聴講をさせると掛け合ったときの「どーぞどーぞ」というお返事の寛大さそのままです。なお、ご返答のポイントは、ハ行子音の成り立ちの歴史、慣例的に用いられている音素記号 /h/ について、「拗音」と上昇二重母音、そして逆行同化という考え方、この4つでした（福居先生、間違っていたらこっそり教えてください！）。どれもこれも、日本語音声の基本的な側面として福居先生がお教え下さったことばかりです。こんな大切で基本的なことですら自分の記憶から引き出せなくなっているのですから重症です。自分の頭の中で、自分で解決できる問題だけに取り組む習慣がこの10年以上の間でついつい壊れてしまったようで

す。非常に痛い経験でしたが、その痛さは自分の目を覚ますのに十分でした。この講演会の企画をきっかけに、日本における口蓋裂患者さんのスピーチ評価に音声学的な知識と IPA による表記を導入しようという機運が高まりましたので、基礎的な知識を振り返りながら、その活動にできるだけ積極的に関わろうと努めております。

寄稿をお引き受けしてここまで書き綴ったことを振り返りますと、自分のキャリアの転機には必ず音声学が、そして私に音声学の楽しさを垣間見せてくださった福居先生の存在がありました。そして私のいまの仕事を支えている「音」に対する感覚やコンセプトは、福居先生とのご縁で生まれ、育まれたものということ、なによりも、単位の有無や公式に履修したかどうかなどは関係なく、間違いなく福居先生は私にとって「恩師」だと改めて実感いたしました。福居先生、ゼミ生でもない人間から突然の恩師と呼ばれることを重たいなどと仰らず、何卒いつもの笑顔でお受けくださいませ。お願い申し上げます。

そんな大切な恩師へのお返しがまだ何もできておりませんが、わたくしにできることといえば、言語治療やそれにまつわる研究の現場と音声学の結びつきを強めて、もっとたくさんの人の人生に役立てることだと思っています。上記の口蓋裂のスピーチ評価もその一つです。さらに、わたくしのそんな思いに賛同してくれている心強い味方を、すでに職場で見つけています。言語の音声を物理モデルの観点から徹底的にアプローチをかけようという、私と同じように変わり種の歯医者さんです。実は先生もその人に一度だけ会っていただいているのですが、お心当たりはおありでしょうか？この人とお話しをしていると、スピーチや音声って面白いよね！という知的好奇心が、学生時代の頃のように再び私の元に訪れてくれます。この人のご縁も福居先生がいらっしゃらなければ繋がらなかったでしょう。まだ何も結実はしていませんが、必ずや何かを生み出すつもりで意気込みは十分です。そんなわけで福居先生、出来の悪い教え子がまた質問に押しかけるかもしれません。そのときには出来の悪さには目をつぶって、引き続き寛大で温かいご教示を下さいませ。宜しくお願い申し上げます。せめてものお詫びはアクアヴィットでいいですか？

拙い筆ではありますがわたくしが思ってきたことを文章という形でやっとお伝えすることができました。福居誠二先生、これまでのご指導ご鞭撻に心から感謝申し上げます。本当に有難うございます。そして、ご退職おめでとうございます。先生の末長いご健康とますますのご活躍をお祈り申し上げます。Skål!!

補足1：唇や上顎が左右に分かれたままの状態で赤ちゃんが生まれることがあります。この状態のことを、唇なら「口唇裂」、上顎なら「口蓋裂」、両方なら「口唇口蓋裂」と呼びます。日本では約500人に1人の割合で生じますが、計画に沿った専門的な治療（哺乳指導、手術、言語治療、矯正治療など）によって、ほとんどのお子さんが健やかに育っていらっしゃいます。

補足2：当時はまだ言語聴覚士という国家資格がなく、名称も「言語療法士」「聴能言語士」など様々でした。1999年に第一回目の国家試験が行われました。